

人生を拓く

11

篠原 益夫さん(86) 西町2

喜久子さん(83)

ともに東川で生まれ育ちました。益夫さん26歳、喜久子さん23歳の1955(昭和30)年にお見合い結婚。2人の息子を育てました。

益夫さんは農家の三男。尋常小学校卒業後の1942(昭和17)年、13歳で川崎市内の鉄工所に旋盤工見習いに。

3年目の昭和20年3月10日、ひと月後に故郷に疎開予定だった直前の夜、多摩川対岸の東京大空襲を目の当たりに経験しました。

「爆弾がバラバラとまとまって落ちてきたんだ。どこまでが火の区切りなのか…。焼け野原の先に渋谷、大井町あたりまで見えた。あんな経験は思い出したくもない。帰ってきた時は極楽みたいなものだったね」。

旭川市内の小さな木工場を経て小西木材に。53歳まで25年間勤め、その後72歳まで20年間、職業訓練指導員として東川の知的障害者通所施設(当時)に勤めました。故小西義道社長からは「何でもいいから資格を取っておけ」と言われ、それを道標に



頑張ってきたそうです。

喜久子さんは15歳の時から25年間、旭川林務署の東川苗ほ(現東川農業振興社畑地と町有ぶどう畑)に勤めました。

結婚の翌年、長男が生まれると乳飲み子を背負って仕事場へ。午前6時半、湯たんぽを入れて毎日自転車通いました。

「休憩時間ごとにお乳を吸わせて、おむつを取り替えて、寝かしつけて、みんなが仮眠している昼休みにおむつを洗濯してね」。

共働きで無理を重ね、40歳過ぎからリウマチが悪化、手足の痛みで動けなくなること。今も自宅療養を続けています。歩行のために愛用しているのは、孫娘が赤ちゃんだった時に使っていた乳母車。益夫さんが手押し車に改良し、ていねいに使い続けてきました。

夫唱婦随で結婚60年を迎えた今年3月、思いがけないプレゼントが。息子たちが旭岳温泉のホテルに宿泊泊招待してくれたのです。その発案をしたのがいまや27歳になった孫娘。「ばあちゃん、パパをどうやって育てたの？って私に聞くの」。

駆け抜けた日々は、今改めて輝きを増し、かけがえのない宝ものになりました。

俳句

春風に囀る群の指揮はだれ
 啓蟄や這い出す者は我なるか
 春光が我が町内の名前なり
 暫くは許してしまおう牡丹雪
 雪解川鞍馬の如く大海へ
 一瞬の間合い春鹿翻る
 春の宿地酒と訛のおもてなし
 春風にいつかやさしき身のこなし
 前を行く人も見上げる春の月
 あの街に帰ろう光るねこやなぎ
 優しさをこの地に記し歩む春
 ジーンズに詰め込む肢体春來たる
 春の陽が銀ラメ平野に散りばめて
 春浅しつかの間休む道の駅
 しんがりはブルートレイン鳥雲に
 頬撫でる風新しき春の旅
 青雲の夢をいだきし春思う
 目を凝らし芽生えさがして散歩道
 春寒し同齡の訃のたてつづけ

杉山 山りつ
 山口 佐知子
 横田 則子
 若田 久
 高瀬 潤
 石澤 清宏
 澤田 久美子
 松山 蓉子
 三島 智
 若田 郁
 本田 咲
 佐々木 りえ
 山内 みゆ
 長谷川 きみゑ
 小林 ろぼ
 高橋 公花
 杉山 ひろのり
 保科 なほ
 徳光 吐苦

